

〔研究ノート〕

## アトス記

—— ドストエフスキー 或いは三島由紀夫 ——

国 松 夏 紀\*

バルカン半島南端のギリシア東・北部，そしてさらに南のクレタ島と小アジアのトルコ西部に囲まれたエーゲ海，と言うよりはむしろ，文字通り多島海の北端に位置するハルキディキ半島，その西の付け根にはビザンチン以来の古都テッサロニキがある半島の先端は，さらに三つに枝分かれしている。東から順に，アクティ，ロンゴス，カッサンドラの各半島であり，このアクティ半島の東南端に標高2033メートルのアトス山もしくは単に聖山（アギオン・オロス）が聳える。

長さ60キロメートル，幅12～16キロメートルのこの半島（360平方キロメートルというデータもあるが，計算が合わない）には，東ローマ帝国初期に個人的修行のための修道小屋（庵室）が作られたのを起源として，10世紀以降国家的保護・奨励の下に多くの東方正教会の修道院が建てられ，聖地となる。14世紀末～15世紀初頭の最盛期には，修道院40，修道僧36,000人を数えたといわれる。ギリシア正教は言うまでも無く，ブルガリア正教，セルビア正教そしてロシア正教の修道院もある。その後，とりわけイスラム，オスマン・トルコの圧迫下に衰微し，17世紀半ばには修道僧1,500人ほどになってしまった。現在は，この最悪の時期よりもなお悪く，修道院の数は20，修道僧は664人，見習い修道僧等を含めても1,000人ほどである（1998年。2000年には2,000人というデータもある<sup>1)</sup>）。

---

\* 本学文学部

キーワード： 聖山アトス，ドストエフスキー，三島由紀夫，「青」

ロシア系の修道院は、アトスにあっては比較的後発のようであるが、ロマノフ朝の保護により勢力を誇った。19世紀末から20世紀初頭にかけてには、パンテレイモン修道院に1,000人、アンドレイ修道院に800人の修道僧がおり、もう一つのイリイン修道院とあわせて、見習修道僧その他を含めると6,000人を下らないロシア人が在住したと言われる。しかし、ロシア革命後ロマノフ朝の援助が断絶するのにもない衰微を極め、アンドレイ、イリイン両修道院は無住となり、後者はロシアの手を離れる。アンドレイ修道院は復興の兆しが見られるようであるが、唯一残ったパンテレイモン修道院に住むロシア人、つまりは現在アトスに暮らすロシア人は40人ほどにすぎないと言う<sup>2)</sup>。

ハルキディキ半島からの陸路は険しい山並みに遮られ、アトス自体もまた90%以上が海にまで迫る山岳地帯である。そうだからこそ修道の地に選ばれたわけであるが、未だに外界との交通は、それがかつての小船からフェリーボートに変わったとは言え、船にのみ頼っている。アトスの玄関口ダフニの港から政庁のあるカリエスまでは、使い古されたバスが我々を苦しげに運び揚げてくれるとは言え、半島内の移動はほぼ徒歩によるしかない。電気も電話も無いと言われていたが、電気は自家発電によるのだろうか来ていたし、電話も通じていたようだ。シモノスペトラ修道院で一宿を乞うたとき、「電話（予約）をしたか？」と聞かれたので。様々な細部での止むを得ざる変化はあるものの、修道僧たちがほぼ自給自足（コーヒーを産するわけはなし、ウゾーもまた。カリエスやダフニの商店に「買い出し」らしき修道僧の姿も見かける）の修業生活を行い、動物を含め（犬以上の大きさと言うが、猫は可だろうか）「女人禁制」を厳守し、正教信徒以外の入山者を制限している、地球上に残された数少ない別天地であることに変わりはない。アトスは、イタリアのヴァチカンとは違った意味で、ギリシアにあって古来外界とは隔絶した小国家の様相を呈し、1926年以来ギリシアを宗主国とする独立した神政共和国、現在は、ギリシア共和国の「アトス自治州」となっている。

在住者の極端な減少は、「別天地」の維持を困難にしており、懸念されている大地震がこの地を襲えば、老朽化した修道院群はひとたまりもなく壊滅

## アトス記

してしまうかも知れない。そこに目を付けたのが、ギリシアもその一員であるEUで、修道院群を含めた環境保全と引き替えに、アトス全域の「観光地化」を目論む動きもあるようだ<sup>3)</sup>。正教信徒以外のアトス入山が、何段階かの面倒な手続きを踏まなければならない「許可制」から、近年「届出制」に改められたのも、この動きと関連があるような気がしてならない。「届出制」になっても、外国人の滞在は従来通り3泊4日、1日の受け入れは10人に限られているのではあるが<sup>4)</sup>。

### \*

1996年4月～9月の半年間、海外研修の機会を得た。1988年、キリスト教化1000年記念の年、モスクワとレニングラード（当時はまだこう称し、サンクト・ペテルブルクと旧名称に復したのは1991年）を駆け足で旅して以来8年ぶりのロシアであった。3月末日、大阪伊丹から新潟経由ウラジオストクに至り、シベリア鉄道でハバロフスク、イルクーツク、オムスク（かつてのドストエフスキーの流刑地）、エカテリンブルグ（ここで、ロマノフ朝最後の皇帝ニコライ2世とその家族が射殺された）の各都市に途中下車しほぼ2泊ずつ滞在して、おもむろにモスクワ入りしたのは4月半ば過ぎのこと。この年の復活祭は、オムスクを深夜たちエカテリンブルグへ向かう車中で迎えた。駅まで見送ってくれたオムスクのガイドにイースター・エッグとクリーチ（復活祭用の円筒形パンケーキ）を頂戴したことを思い出す。

モスクワでは2ヶ月間、年甲斐もなくホームステイして、中央古文書館と旧レーニン図書館の別館（都心にある本館とは違い、郊外の交通不便なところにある）に通った。前者では、永年の懸案である、ドストエフスキー『悪霊』に入らなかった一章「チーホンのもとで」（通称「スタヴローギンの告白」）の現物を初めて手にし検討した<sup>5)</sup>。連載中の雑誌編集部から、主にスタヴローギンの少女マトリョーシャ凌辱場面にクレームがつき、作家としては何とかこの一章を救わんとして改稿を試み、校正刷に膨大な書き込みをしたものである。この校正刷15葉がアンナ夫人の手によって、厚表紙のノートに

きちんと貼り付けられ保存されている。後者では、1891（明治23）年、皇太子時代のニコライが訪日の際、大津で沿道警備の巡查津田三蔵に切られ負傷した「大津事件」関連の当時の新聞記事を片端から筆写した。

次いでやはりホームステイのペテルブルクでは、ロシア文学研究所（プーシキンの家）とネフスキー通りにある公共図書館（シCHEDリン図書館）に通った。前者では、「スタヴローギンの告白」のヴァリエント（アンナ夫人筆写本）これも現物を初めて手にし検討した。後者では、モスクワのトレチャコフ美術館で多くの作品に接してから夢中になっていた、19世紀ロシアの特異な戦争画家ヴェレシチャーギン（1840～1904）の文献を渉猟した。海軍幼年学校—士官学校出身で、日露戦争にも画家として従軍したのだが、同期の艦長に誘われて偶々乗船した戦艦が旅順口で日本軍の敷設した機雷に触れ、轟沈する艦と運命をともにしたヴェレシチャーギン。彼は、日露開戦前夜には、日本にも来ていて、何点かの習作も残している。というわけで大いに興味をそそられ、公共図書館ばかりでなく、ネフスキー通り端から端まで書店・古書店を巡り歩いたりもした。その気になると面白いもので、図書館ではあまりに大物すぎて複写を諦めたものに、古書店で版は違うものの巡り会ったりした。

さて、ここでようやくアトスへの道を辿ることになる。ペテルブルクからモスクワへ戻り、さらに南下してウクライナのキエフに至る。その先は、オデッサからイスタンブールまで黒海をクルージングということも考えたが、幸便なく、キエフからイスタンブールへ直行、さらに専らアトスへの「ビザ」取得のためアテネに至る。このコースは偶然のものではなく、ロシア正教の源流に遡るという意義を有する。東方正教はビザンチンのコンスタンティノーブルから黒海沿岸に流れ着き、キエフ・ロシアはそれを国教とする（988年）。コンスタンティノーブル陥落後、モスクワ・ロシアが自ら東方正教の唯一正統な継承者を以て任じたことは周知の通りである。18世紀初頭、ピョートル大帝の近代化＝西欧化政策の一環として新首都サンクト・ペテルブルクが建設されて以降もなお、主要な宗教儀礼はモスクワで執行された。また、アト

## アトス記

スはロシア正教のみならず東方正教全体の聖地として修道生活の原点であり、そこには東方正教そのものが時代の流れを超えて「冷凍保存」されている、とも考えられる。

筆者としてはここに3泊4日のアトス「巡礼」を細部にわたって記しておきたい誘惑に駆られるのであるが、それは如何にもこの場には相応しくないとと思われる。そこで巡礼記<sup>6)</sup>は断念するとして、そのいわば上澄み部分、アトスにおいてだからこそ得られたに違いないインスピレーションを巡って、「研究ノート」として以下の三点を記すに止める。いずれも、文字通り雲一つなく明るく晴れ上がった空のもと、限りなく青く穏やかな海を眺めて独り山道を次なる修道院を求めて歩きながらの想念である。

### \*

(1) 人の気配の絶えた山道、足下には広大な青い海、何の脈絡もなく突然思い至る。スタヴローギンの「黄金時代」の夢に現れる「多島海」とは、まさに眼前のこの光景なのだと。スタヴローギンは、密かにチーホンの庵室を訪れ、近々公刊予定の告白文書（印刷物）を提示する。それが引用され、読者はチーホンと共に「スタヴローギンの告白」を読むことになる。そこには、首都ペテルブルクでのマリア・レビャートキナとの秘密の結婚、マトリョーシャ凌辱を含めた数々の悪行、放蕩が告白される。そして、その後のヨーロッパ遍歴中、ドイツで乗換駅を間違えて支線に入り込み、とある駅で戻りの列車待ちを余儀なくされる。駅近くの旅館に部屋を取り、食事を済ますと汽車の旅の疲れから、夕方頃ぐっすりと寝入ってしまう。そこに、スタヴローギンが「黄金時代」と呼んでいた17世紀フランスの画家クロード・ロラン作「アシスとガラテアのいる風景」がリアルなヴィジョンとなって現れる。ギリシア多島海の一隅、青くやさしい波（遠近に小船がたゆたう）、島々と巨岩（そこからこちらを見下ろしているのは、ガラテアに思いを寄せるポリュペモスであろうか）、花咲く岸辺（枯れ木に布掛けした日除けの陰では、アシスとガラテアが睦みあい、その足元では、キューピッドが紐で結んだつが

いの鳥で遊んでいる、左脇ではニンフたちが戯れる)、遠く果てしないパノラマ(彼方には島影、此方には高い山影)、呼び招く太陽は傾きかけ(海に照り映え)ている……ここをヨーロッパ人類は自らの揺籃の地として記憶した。ここは神話の最初の舞台、地上の楽園……ここには美しい人々が住んでいた……スタヴローギンは、幸福感に満たされ涙さえ浮かべて陶然と我に返るのだが……

ドレスデンの美術館にある「アシスとガラテア」(100cm×135cm, 1657年作)は、正直のとのころ、画面が暗くて何がどのように描かれているの不明瞭であった(1988年)。複製では、幾分明瞭であり、褐色に退色した画面を「眼前の光景」によって修復することが可能にも思える。だがしかし、クロード・ロランを抜きにした方が、スタヴローギンの「黄金時代」の夢と今眼前にある光景とは遥かにぴったりと符合する。つまり、「多島海」という言葉に幻惑されて、細々した道具立てに拘泥しがちなのであったが、ポイントは要するに「遠く果てしないパノラマ」、それが「青」で満たされていること。残念ながら、「スタヴローギンの告白」の一章は『悪霊』からは「削除」されたが、この捨て難いヴィジョンは次作『未成年』におけるヴェルシーロフの「黄金時代」の夢として生かされた。それは、ドストエフスキー自身の「黄金時代」に寄せる愛着の表われでもあろう。そしてまた、ただ一幅の絵画からアトスにおける筆者に「黄金時代」の夢を想起させ「符合」をインスパイアするだけの的確な一節を書かしめたのは、ドストエフスキーのアトスに寄せる憧憬の念でもあったろう。

『悪霊』構想・執筆の頃、1870年7月2日付ドレスデン<sup>7)</sup>から姪のソーニャに宛てた手紙には、コンスタンティノーブル、アテネ、エーゲ海、シリア、そしてアトスなど「東方諸国」へ、ロシア帰国前に旅したいという強い希望が述べられている。また、1872年2月4日付、この頃はすでに「スタヴローギンの告白」のトラブルで『悪霊』の雑誌連載は中断していたのだが、医者であり友人でもあるヤノフスキー宛の手紙にも同じ方面への旅行とそれによる一冊の本の執筆計画が述べられている。この計画は結局実現しなかったが、

モチュールスキーによれば、この頃すでにドストエフスキーは『ロシア、モルダヴィア、トルコその他の聖地巡礼者・聖アトス山の修道士パルフェーニーの物語』を読んでいて、感銘を受け、『カラマーゾフの兄弟』、ゾシマ長老の説教の文体にも影響しているとのことである<sup>8)</sup>。

ドストエフスキーの遺作『カラマーゾフの兄弟』には、アトスが様々なしかも重要な影を落としている。まず、長老と長老制度の起源がアトスに求められているし、長老の権威はコンスタンティノーブル総主教をも凌駕することを示す「実話」が物語られる（第1編5）。そのような長老の権威を嘲笑うかのように、やがて殺されることになる父フョードル・カラマーゾフは、アトスの「女人禁制」を巡って混ぜっ返し彼一流の悪ふざけの種にしたりする（第2編1）。さらに、大方の期待に反する故ゾシマ長老の腐臭について、図書係の僧ヨシフ主教は、偉大なる正教の聖地アトスの定めを持ち出して反論する。聖者の条件は、遺骸が腐敗しないことではない。埋葬され幾歳月のうちに骨となり、その骨が蠟のように黄色くなった者こそが神から祝福された者なのであり、もし黒くなっていたら聖者の資格はない。昔からアトスでそう決められているのであると。そんなのは知ったかぶりにすぎない、ロシアにだって聖人はいっぱいおるさ、アトスもトルコの統治下すっかり堕ちてしまった、と混ぜっ返されるのではあるが（第7編1）。

(2) 晴天の山道、深く青い海を一望しつつ、また突然の如く、アンドレイ・ルブリョーフ（1370?～1430?）の「青」はこの「眼前の青」と思いたい。彼自身がこの海を見ていなかったとしても、師匠のフェオファン・グレーク（1330?～1410?、ビザンチンからやってきたギリシア人）を通じて継承したのだと。

もう一人のアンドレイ<sup>9)</sup>とも言われる、アンドレイ・タルコフスキー監督の映画『アンドレイ・ルブリョーフ』（1967）でも知られるこの中世のイコン画家、その代表作『聖三位一体』（142cm×114cm）は、現在モスクワのトレチャコフ美術館に置かれている。本来置かれてあるべきモスクワ北郊のセルギエフ・ポサード内聖三位一体教会にはレプリカが掲げられている。新装

なった美術館の適度の照明の下、旧約アブラハムによる三天使饗応になぞらえた画面は、500年以上の歳月の経過を感じさせない彩りの鮮やかさである。とりわけ、三天使がそれぞれまとう衣の青は、「青い炎となって燃え上がる<sup>10)</sup>」とも言われるが、やはり限りなく深く青い海の青であって、すっきり魅せられてしまっていたのであった。この青の直接的な原料は、『青の美術史』でも検討されているよう<sup>11)</sup>に、ラピスラズリイでもあろうが、比喩的と言うべきか或いはより直接的な源泉は、この海の色であるに違いない。次のような一文もこの源泉からこそ考えてみたいところである。「ルブリョーフとその派の画家たちの、イコンに見られるブルー、紫、エメラルド・グリーンといった寒色系の優越性は、イコンに高遠な精神性という一つの特徴を与えている<sup>12)</sup>。」

(3) そしてまた唐突に、三島由紀夫もここアトスに来ていれば、自決するようなことにはならなかったのではないかと。特に何の論理的脈絡も無く、ただそんなフレーズとなってやってくる。この青さに染められること、それはかなり保存の効く生のエネルギーとなり得るのではないか？ というようなこと。あるいは、直接的に連想されたのは、三島の遺作『天人五衰 豊饒の海第四巻』カバー、瑤子夫人作「青の諧調」による海の画だったのだが、この青さを誰かに伝えたい、その気持ちだけでも生に繋ぎとめるだけの力になるのではないかなどと。もちろん三島もかつてギリシアを旅し、おおいにインスパイアされて『潮騒』を書いたのは周知のことだが、アトスまではきていないはずなのである……この条り、記憶の中にはかなり鮮明に残っていたのだが、旅行中のノートを確認してみると、そこには書かれていない。スタヴローギンの黄金時代の夢とアンドレ・ルブリョーフの青の件は確かにメモがあるのだが。そこで、口頭報告<sup>13)</sup>の際には、『天人五衰』の末尾、つまり『豊饒の海』全巻の幕切れをもじって、三島の件は「夢」であったのかも知れないとした。しかし、この落ち自体が如何にも作り物めいているので、本稿では削除することにしたい。



## アトス記

### 注

- 1) この段落の「数字」等は、「Вздорнов」(以下、文献等に関しては資料II各項の冒頭のみを記す)を基に、「北原柊二」,「藤谷健」を参照。
- 2) この段落は「Вздорнов」に拠る。
- 3) 「Вздорнов」に拠る。
- 4) 「許可制」から「届出制」への変更については、「99/01/06海外安全センター情報,ギリシャ:アトス山入域」<http://www.joea.or.jp/003/02/099.htm>。
- 5) この検討の一端については、「国松夏紀」参照。
- 6) 概要は、資料I参照。
- 7) ドレスデンの美術館には、先述のクロード・ロラン「アシスとガラテア」ばかりではなく、ドストエフスキーお気に入りのラファエロ「システィンのマドンナ」もある。
- 8) 「Мочульский」стр.324/「モチューリスキー」p.432。
- 9) 落合東朗『タルコフスキーとルブリョフ』参照。
- 10) 『イコン体系』Vロシアのイコン, p250。
- 11) 「小林康夫」[第2章オリエンタルな青]等参照。
- 12) 『イコン体系』Vロシアのイコン, p250。
- 13) 本稿は、本学キリスト教センターにおける小生の「暖炉トーキング(4)アトス記」(1998年6月18日)が基になっている。

### 資料I 記録

- 1996.8.30(金) イスタンプールから空路アテネ着。考古学博物館近く、国立銀行隣りのアスペリア・パレス・ホテル泊。
- 9.2(月) 日本大使館領事部で、アトス山ビザ申請のための紹介状を申し込む。明後日(4日,水曜)発行とのこと。ギリシア外務省教会管理部の場所を教えてもらう。所在地だけでも確認しておこうと訪ねた,そこで、「紹介状」もなしで、思いがけず即「ビザ」の発行を受ける。
- 9.3(火) オリピック航空でテッサロニキ往(5日)・復(10日)航空券購入。近くの旅行代理店でテッサロニキのホテル予約。
- 9.4(水) 日本大使館領事部で「紹介状」受領(朝,ホテルに電話あり)。10日~13日のホテル予約(アスペリア満室で、近くのティタニアに回される)。

9.5(木) 午後4時頃、テッサロニキ着。

9.6(金) 大部分の荷物を預けたままチェックアウト。6:15発のバスで、ウラノーポリへ向かう。9:00頃、ウラノーポリ着。9:45フェリーボートでウラノーポリ発、ダフニへ(乗船しようとしてようやく、この段階での「入山許可証」の必要性を教示され、走り、かろうじて出港に間に合う)。ダフニから、無料乗合バスでカリエスまで登り、クウトゥルウムシウ修道院泊。【夕食】インゲン豆の煮物たっぷり、キュウリ丸ごと一本、オリーブの実、水、塩、パン。

9.7(土) 2:30に「予鈴」、3:00起床「朝の祈り」、《満天の星》。

ロシア系の聖アンデレ教会、アトス最古のプロタトン聖堂拝観。クシロポタムウ修道院までバス、あとは歩きで、西側海沿いのロシア系パンテレイモン修道院に至り、泊。【夕食】ボルシチ、トマトとキュウリのサラダ(ドレッシング)、黒パン、マカロニ、オリーブの実の干した物、?(何やら黒いかたまり)、チャイ、デザート:パンケーキ。

9.8(日) 朝方雨、荘厳なる夜明けの祈りの儀式。朝のコーヒー・サーヴィスは無い模様で、ダフニへ。ダフニの食堂で軽食・休憩後、断崖絶壁上のシモノスペトラ修道院を目指す。

《抜けるような青空の下、限りなく青い海を眺めて歩きながら……考えた》『悪霊』スタヴローギンの「多島海」

フェオファン・グレーク~アンドレイ・ルブリョーフの「青」やっとたどりついたシモノスペトラ修道院満室で、くアトスで最も困難な近道《>を通過して、やはり西側海沿いのグリゴリウ修道院に至る。途中、シモノスペトラから一挙に降り始めたところで、ギリシア人ガイドを伴ったドイツ人中年(同年代か?)といっしょになり、助かる。

【夕食】野沢菜飯風ご飯(ただしオリーブ油味)、パン、チーズ、西瓜、レモン半個、ワイン、水。

9.9(月) 7:20徒歩でダフニへ、10:30着。途中、もうすぐ二十歳になると言うギリシア青年と、シモノスペトラまで同行《アトスには鏡が無い、という話》。正午のフェリーで、ウラノーポリへ。バスで、テッサロニキ帰還、泊。

9.10(火) テッサロニキ発、アテネ着。

## アトス記

9.13(木) アテネ発, モスクワ経由で, 関空へ。

### 資料II 文献等 (著者名乃至書名のアイウエオ順)

- ◇ΑΓΙΟ ΟΡΟΣ. Mount Athos. Tourist Map. 1:75,000 ΠΕΚΟΣ.
- ◇Agiortitis, Monk Andrew. *Guide to Mount Athos*. 1971.
- ◇『アイコン体系』クルト・バイツマン他著, 濱田靖子訳。講談社, 1984年11月。
- ◇*The Oxford Dictionary of BYZANTIUM*. Oxford U. P., 1991.
- ◇落合東朗『タルコフスキーとルブリョフ』論創社, 1994年6月。
- ◇落合仁司(講演)「ギリシャ正教の聖山アトス」2000年5月21日(土)京たなべ・同志社ヒューマンカレッジ第1回。
- ◇Kadas, Sotiris. *Mount Athos. An illustrated guide to the monasteries and their history*. EKDOTIKE ATHEON S.A. Athens. 1993.
- ◇川又一英『聖山アトス——ビザンチンの誘惑』新潮選書, 1989年11月。
- ◇川又一英(ラジオ講演)「聖山アトスの修道士たち」1998年7月5日/7月12日  
[再]NHKラジオ第2。
- ◇川又一英(テレビ講演)「こころの時代/アトスからの手紙」1999年2月13日[再]  
NHK教育テレビ。
- ◇北原柊二「東方正教会の聖地アトスにこだまする崇高なる聖歌」特集ギリシャ—  
エーゲ海の神秘(写真:北井今朝市)“VISA”1998年12月。
- ◇木村浩『ロシアの心・ロシアの風景』NHKブックス・カラー版C23, 1984年10  
月。「聖山アトスのロシア人修道僧」
- ◇国松夏紀「『悪霊』に入らなかった一章「チーホンのもとで」の典拠について」  
北海道大文学部ロシア語ロシア文学研究室年報『スラヴ学論叢』第2号, 1997年。
- ◇小林康夫『青の美術史』ポーラ文化研究所, 1999年10月。
- ◇高橋榮一(解説)『世界の聖域13 聖山アトス』講談社, 1981年3月。
- ◇Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Л.: Наука, 1972  
—1991. Т. 10—12/14—15,  
ドストエフスキー(江川卓訳)『悪霊』新潮世界文学13, 1971年4月。  
ドストエフスキー(池田健太郎訳)『カラマーゾフの兄弟』中公文庫, 1978年7—  
9月。
- ◇Достоевский Ф. М. Письма: В 4-х т. Под ред. А. С. Долинина. М.; Л.  
1928—1959.  
ドストエフスキー(小沼文彦訳)『書簡集』(個人訳全集第15—17巻)筑摩書房,

1972年1月－1975年2月。

- ◇那谷敏郎『ビザンチンの光芒 聖域行』平凡社カラー選書40, 1976年5月。(カメラ：稲村不二夫・平林正久)「奇跡の聖山アトス／“異なった暦と時”の中で」
- ◇那谷敏郎『紀行ビザンチン史』新潮選書, 1976年8月。「6アトス山への道, アトス山縁起. 7カリエ, イビイロン. 黄金時代. 8隠者と首長, 衰退の兆。」
- ◇藤谷 健「〈ルポルタージュ・世界〉キリスト正教の聖地・アトス, いやし求めて神の山へ」2000年1月17日(月)付『朝日新聞』(大阪本社版)。
- ◇Вздорнов, Герольд. Тарасов, Олег. *Святая гора и русские древности*. 《Наше Наследие》Иллюстрированный историко-культурный журнал No.52, 2000.
- ◇松永伍一『聖地紀行』角川選書7, 1988年3月。「アトス山」
- ◇松永伍一『光の誘惑 わが聖地行』紀伊國屋書店, 1994年11月。前半「聖山アトス」後半「エルサレム」。
- ◇三島由紀夫『天人五衰 豊饒の海第四巻』新潮社, 昭和四十六年二月二十日印刷, 同二十五日刊。なお, 巻末には周知のように, 「豊饒の海」完。／昭和四十五年十一月二十五日, とある。装幀：箱・扉, 村上芳正。カバー, 三島瑤子。
- ◇村上春樹『雨天炎天——ギリシャ・トルコ辺境紀行』新潮文庫, 1991年7月(原著は, 1990年8月, 新潮社刊)。「ギリシャ編」アトス——神様のリアル・ワールド
- ◇К. Моочульский, *ДОСТОЕВСКИЙ жизнь и творчество*. YMCA-PRESS ПАРИЖ. 1947 (米川正夫旧蔵書コピー), 1980 (リプリント)。  
モチューリスキー (松下裕・松下恭子訳)『評伝ドストエフスキー』筑摩書房, 2000年5月。

(付記) インターネット上には, 「アトスの悪夢」といった旅行体験記を含めたアトス関連の様々なサイトがリンクしあっている(アトスも時代の網／波を所詮免れ得ない)が, 上記注(4)以外は記載を割愛した。